

中国茶と社員旅行

塚田 實

毎日朝食を終えると、コーヒーを淹れてゆつくり新聞に目を通すのが日課だ。午後には暖かい日本茶を飲むことが多くなってきた。書斎のポットでお湯を沸かし、中国で買った茶漉し付マグカップに注いでお茶を飲む。

北京に二年半駐在した。中国では緑茶、烏龍茶、普洱茶などお茶の種類は豊富だが、消費量が一番多いのは緑茶だ。

緑茶で一番印象的だったのは浙江省杭州市の西湖西にある龍井村で産する龍井茶だ。色、香り、味、形が絶品で「四絶」とも呼ばれている。しかも西湖の南には天下第三泉の一つ「虎跑泉」が湧き出ており、この水で入れた龍井茶は美味しかった。虎跑泉水は表面張力が強く、碗になみなみと注いでも数ミリ盛り上がり、こぼれにくいので有名だ。

烏龍茶は、何と言っても武夷岩茶の「大紅袍」^{タイホンパオ}が一番だろう。福建省武夷山は黄山、桂林と並ぶ中国三大景勝地の一つで、世界遺産にも登録されている。十一年前北京事務所の社員旅行で訪れた。

そそり立つ岩山の中腹に大紅袍の原木が四本並んでいる。お茶の木の経済寿命は三十年から五十年と言われているのに、樹齢三百年を超えると言われる原木は、未だに最高の茶が取れるらしい。原木の茶は高価で我々の口にはとても入らない。しかし麓では原木から接ぎ木をした二代目、三代目があり、我々はこれを楽しめる。華やかな乳香がし、岩茶独特の甘みと深みのある味が楽しめる。

ところで社員旅行は北京事務所が三組に分れ、一組三十五名の団体で二泊三日の旅だった。夜の宴会は無礼講で、運転手の人たちも皆が安物の白酒を持ってきて、一人ずつ私に乾杯を迫る。下手な中国語を操りながら、若い人たちとも飲む。調子に乗って飲んでいると目が回り、部屋に戻るとベッドに届かず、扉の横に倒れて朝まで眠っていた。翌日たたき起こされて、ほうほうの体でいかだに乗り、約九キロの九曲溪川下りを何とかやり終えた。今となっては、この乱暴な無礼講も大紅袍とともに良い思い出だ。